

劇  
16ミリ  
白黒/30分

文部省選定 厚生省推薦 東京都教育委員会選定  
独立系配給

- 企画  
中外製薬株式会社
- 監修  
山本嘉次郎

スタッフ

- 原案  
上田忠信
- 製作  
村山英治  
米山 彊
- 脚本  
岡野薫子
- 演出  
大橋秀夫
- 撮影  
安 承玟
- 音響  
大野松雄
- 編集  
沼崎梅子  
長谷川宣人
- 解説  
高橋和枝

朝日新聞の青鉛筆欄で猫を募集中と伝えられるや問い合わせが殺到し、約500匹の猫候補から選ばれたのが“ノラさん”こと、東京雑司が谷の版画家の家に偶然迷いこんだ真正正銘のノラ猫だった。



吾輩は猫である——といっても僕には家がない。それでも僕は自由。僕はこの町が好き。陽気はいいし、食物には不自由はなし。春、僕はまさにわが世の春を謳歌した。だがそれも束の間、初夏になると僕の暮らしに不吉なものが現れた。行く先々にあの気味の悪いハエが先回りして不作法にも食物の上にウジをうみつつける。ノミはふえて体は痒くなるし、飲み水場にもポーフラがわいた。たまに現れるゴミ屋も、奥さん方と大喧嘩して来なくなり、空き地も川もゴミで一杯、犬をつれた奥さんは道々脱糞する犬にも全く無関心だ。ゴミというゴミは異様な悪臭を放ち、僕は飢餓状態にあった。勝手口で丸々と太ったネズミを発見、これはご馳走と眼をこらすとネズミの体もダニで一杯！

ある日、この静かな町に救急車がきて知り合いの坊やをのせて走り去った。ケガかと思ったら蚊が媒介する日本脳炎だった。新聞が小児マヒの流行を伝えると、奥さんたちは、予防の生ワクチンを貰いに保健所へ殺到。そしてやっとう人間と害虫どもの闘いが始まった。町をあげての大掃除、殺虫剤の臭いには閉口したが、一夜明けると本当に町はきれいになった。だが、ぼくの餌場のゴミの山は姿を消し、殺虫剤付きの食べ物ばかり。折も折、軽トラックできた魚屋がアジを持って家に入るところだった。僕はそのアジを失敬しようとして……。それからの苦労は筆舌に尽し難い。ともかく僕はノラ猫稼業から足を洗い、ご隠居夫婦の飼猫になった。〈猫は家につく〉という教えに従ったわけである。